

堅樹院日寛における「両卷血脈」の受容について

水 谷 進 良

一 はじめに

堅樹院日寛（一六六五—一七二六）は、富士大石寺第二六世に数えられ、日蓮宗教学史上、大石寺教学（石山教学）を体系化した学匠である。また日寛が活躍した時代は宗学醞釀期にあたり、日蓮教学宣揚の氣風が高揚した時代であった⁽¹⁾。

ところで、日寛の教学は代表的著作である『六卷抄』によつて知ることができる。それに基づいてその思想を考えてみる時、日寛自ら「但^テ依^テ文底^ニ以^テ立^ツ宗旨^一」⁽²⁾というように、法華經寿量品の文底に基づき宗旨を立てている点が知られる。この文底という表現は日蓮『開目抄』にみられ、本門寿量品の文の義意に一念三千の法門が存すると主張される一文である。しかし日寛が主張する寿量文底とは、寿量品を文上・文底の二つに分別し、寿量文上を釈尊教相上の所説として斥け、寿量文底を「文底独一ノ本門」⁽³⁾と位置づけ、両者に本質的な違いを論じる。すなわち法華經文上は、文底に秘する本法と対すれば迹教であるとみなす。さらにその本法を施

す教主を「末法下種ノ主師親、本因妙ノ教主、大慈大悲之南無日蓮大聖人」⁽⁴⁾といつて、日蓮本仏論へと展開する。

つまり日寛は、寿量顕本仏は、本因妙教主日蓮の垂迹仏であるとし、化導の役目を終えた在世脱益の仏であるとし、主たる日蓮が文底秘沈の妙法を施す存在であることを主張するのである。しかし、かかる思想は日蓮の確実な遺文からは見いだすことはできず、その淵源は日蓮の名に仮託して作成された『本因妙抄』、『百六箇相承』（両抄を併せて「両卷血脈」と称される）に見られる。両抄は共に日蓮の真筆は伝わらないが、日興門流の秘伝書とされ、大石寺教学において重要視されている。日寛は両抄に示される相承に立脚し、前述の教義を組織するのである。そこで本稿では、日寛教学の源流として重要な意味を持つ「両卷血脈」を、日寛がどのように受容したのか、その一端について少しく考察してみたい。

二 「両卷血脈」について

まず『本因妙抄』であるが、具名を『法華本門宗血脈相承事』といい、表題に「本因妙之行者日蓮記之」とあるために『本因妙抄』と称される。本抄は伝教大師最澄が、仏立寺道邃より相承されたと伝わる『三大章疏七面相承口決』の形式に準拠し、さらに日蓮が本門の立場から独自の口決相承を試み、直弟子日興へ伝授したものとされる。思想的には、下種益の要法たる妙法五字を本とし、釈尊所説の法華経を迹とみならず本迹論や、それに基づく釈尊脱仏・日蓮下種仏の思想が見られ、真筆現存・曾存を中心とした他の日蓮遺文の教示と適合しないため思想的に問題がある。なお、古写本としては『宗全』に次の三書が挙げられている。

- ① 大石寺日時写本（明徳二年、一三九一、富士大石寺蔵）
 - ② 要法寺日辰写本（永祿三年、一五六〇、西山本門寺蔵）
 - ③ 妙本寺日我写本（元龜三年、一五七二、保田妙本寺蔵）
- ①は本抄最古の写本とされるが、大黒喜道氏によると、本写本と日時自筆曼荼羅本尊の筆を対照した結果、筆跡が異なる旨を指摘され、日時書写では無い旨を指摘されている。⁽⁶⁾ 次いで②の日辰写本は『宗全』に収録されるが、その奥書によると、上行院日尊の写本を転写された旨が記される。

右本因妙抄一卷、以洛陽上行院日尊上人自筆之本、写之畢、但於彼本「無」日尊書写之判形、然亦住本寺日住上人云、此本因妙抄是日尊之筆跡也、其証拠者東山日尊石塔七字与「此抄中七字」大同、故也、永祿三庚申年十二月十日未刻写之畢 日辰在判

この記述に従えば、日尊書写を証明する判形は添えられていないが、日辰の師である住本寺日住（日在を示すと思われる）によれば、京都東山に存する日尊の石塔七字と同写本の筆跡が附合することから日尊写本とみる旨が示される。ただし日辰は本抄を書写しているものの「不_レ拜_セ御正筆ノ血脈書_ヲ間ハ、謀実難_レ定_メ」として、その信憑性について疑問を呈しつつ、「両卷血脈」の会通に苦心される旨が記される。また③についてはその詳細は不明である。

次いで『百六箇相承』は、具名を『具騰本種正法実義本迹勝劣正伝』といい、前半に「脱_ノ上_ノ本迹勝劣口決」として五一箇条、後半に「種本迹勝劣」として五六箇条があり、厳密には一〇七箇条となるが、本文中に「右此ノ血脈ハ本迹勝劣其数一百六箇注_ス之_ヲ」とあるため『百六箇相承』と称される。古写本としては、『宗全』に次の三書が挙げられる。

- ① 妙本寺日山写本（稲田海素氏蔵）
- ② 要法寺日辰写本（永祿元年、一五五八、石井智明氏蔵）
- ③ 書写者不明の古写本数種

①は稲田海素氏所蔵と伝わるが、その詳細は不明である。
②は日辰『富士与当家異義』に「日出上人永禄元年戊午 太歲十一月ニ令三日辰ニ書ニ写セ一百六ヶノ本迹（10）」と、永禄元年（二五五八）に重須本門寺九世日出の依頼を受けて『百六箇相承』を書写した経緯が確認できるため、日辰書写にかかる写本と思われる。③は『宗全』に对照本として紹介されるのみで、その詳細は不明である。

したがって『本因妙抄』・『百六箇相承』共に、文献的信憑性が高い写本としては、一六世紀後半の戦国期に成立した日辰写本が最古のため、その思想だけでなく、文献的問題も存している著作であることが理解できる。また、日寛が大石寺にて披見した「両巻血脈」は、誰の筆にかかる写本かという問題も存するが、この点は今後の課題としたい。

三 日寛教学における「両巻血脈」の受容

そこで、日寛の「両巻血脈」受容の問題であるが、ここでは日寛の名著『六巻抄』から、種脱論、一念三千論、本因妙教主論に関する記述を見てみたい。なお、『本因妙抄』の引用箇所には太字で傍線、『百六箇相承』の引用箇所には太字で波線を、それぞれに施している。

まず種脱論に関しては、次の主張が見られる。

一ニハ爾前当分迹門跨節、是權実相對第一ノ法門也、二ニハ迹門当分本門跨節、是本迹相對第二ノ法門也、三ニハ脱益当分下種跨節、是種脱相對第三ノ法門也、此則宗祖出世ノ本意ナリ、故ニ云ニ日蓮法門ト也、今日ニ一念三千法門但文底秘沈ト意在ニ於此ニ、学者深思云云、問、当流ノ諸氏、他門ノ学者、皆以ニ第三教相ヲ即名ニ第三ノ法門ト、然ニ今以ニ種脱相對ヲ名ヲ為ニ第三ノ法門ト、此事前代未聞、若無シハ明文一誰カニ信レ之ヲ耶、答第三ノ教相ハハ彼ホ天台ノ法門ニシテ而モ非ニ日蓮ノ法門ニ、応レ知ル彼ノ天台ノ第一第二ハ通シテ属ス当流ノ第一ニ、彼第三ノ教相ハ即属ス当流ノ第二ニ也、故ニ以ニ彼三種ノ教相ヲ若シ望ハ当流ニ則成ル二種ノ教相ト也、妙楽云前之両意ハ約シ迹門ニ、後ノ一意ハ約シ本門ニ是也、更ニ加テ種脱相對ノ一種ヲ以テ為ニ第三ニ、故ニ云ニ日蓮ノ法門ト也、今引テ明文一以証ス此義ヲ、十法界抄云四重ノ興廢云云、血脈抄云、四重淺深云云、又云下種ノ三種教相云云。本尊抄云彼脱此種等云云。可レ秘可レ秘云云（11）

この主張は、日蓮『富木入道殿御返事』に見られる「日蓮が法門は第三の法門也」という「第三」の表現に対し、他門流においては天台大師智顗所説の三種教相中、第一第二の迹門教学から、第三師弟遠近不遠相、すなわち本門法華に立脚する旨を宣言された教示として理解されている。しかし日寛によれば、正しくは種脱相對を示すものであるというものである。つまり『本因妙抄』の四重淺深、『百六箇相承』の下三種三教相（14）の教示に従えば、第三師弟遠近不遠近相が本門に属するといえども、釈尊教相上の所説に過ぎず、それは在世

衆生を対象に脱益を被らせる利益に限るとする。

この点について、日寛は「両卷血脈」の教示を趣意として引用しているが、下種三種教相とは、『百六箇相承』中、後半五六箇条の内、三二条目「下種三種教相ノ本迹」に配当される教示で、該当箇所は次の通りである。

二種ハ迹門、一種ハ本門也、本門ノ教相ハ教相ノ主君也、二種ハ二十八品一種ハ題目也、題目ハ観心ノ上ノ教相也⁽¹⁵⁾

すなわち、教相以上の観心を想定し、本迹二八品を等閑する思想が見られる。またその観とは四重興廢判に約せば第四の天真独朗の観に相当し、先の三は教相門に属するため廃するとする。これらの点は日寛の文底下種法門と深い関わりを持ち、後述する一念三千論・本因妙教主論にもその影響が見られる。日寛はかかる教示に従い、法華経は末代衆生には無益であり、日蓮の「第三」という教示は、教相不説の文底秘沈の本法を暗喻した教示であると主張するのである。その他、『観心本尊抄』の「彼^レ脱此^レ種⁽¹⁶⁾」、先に述べた『十法界事』の四重興廢判（但し本抄は日蓮の真筆は伝わらず、文献的問題が指摘される）も文証として引用するが、共に「両卷血脈」の教示を経由した上での理解である。

次いで、一念三千論に関しては、次の主張が見られる。

若当流ノ意ハ迹本二門ノ一念三千通^ヲ名^ヲ理ノ一念三千ト、但以^ハ文底独一ノ本門^ヲ名^ヲ事ノ一念三千ト也、是当家ノ秘事ナリ、不レ可^レ口外ス者也、問迹本二門ノ一念三千何^ノ通^{シテ}名^ヲ理ノ一念三千ト乎、答此^ニ有^二意一、ニハ俱ニ理上ノ法相ナル故ニ、ニハ俱ニ迹中ノ本迹ナル故ナリ、本因妙抄云、一代応仏ノ域^ヲ引^{ヘタル}方ハ、理ノ上ノ法相ナレハ、一部俱ニ理ノ一念三千也云云。又云迹門^ヲ名^ヲケ理ノ一念三千ト、脱益ノ法華経ハ本迹俱ニ迹也、本門^ヲ名^ヲ事ノ一念三千ト下種ノ法華経ハ独一ノ本門也云云⁽¹⁷⁾

この主張は、本迹二門の一念三千を共に理の一念三千と見なし、当流で言うところの事の一念三千とは「文底独一ノ本門」であるというものである。すなわち、本門の一念三千といえども、教相上における本迹の概念を意味する「迹中ノ本迹」の相違に過ぎないとして教相を等閑する。また、寿量顕本仏といえども、応身仏が歴劫修行を経て報身へと成り上がった域を出ない仏であり、脱益の利に過ぎず、末法には無益であるとする。日寛によれば「両卷血脈」に示される下種（事）の一念三千とは文底独一の本門であり、その法体は久遠元初時に名字即凡身日蓮が証得した本法であると主張する。

また、本因妙教主論については、次の主張が見られる。

問久遠元初ノ自受用身トハ者即是本因妙ノ教主釈尊也、而シテ諸門流一同ノ義ニ曰、蓮祖ハ即是レ本化上行ノ再誕^{ナリト}云云、其義文理分明ナリ、如ニ処々ニ示^レカ之^ヲ、今何^ノ蓮祖ヲ泰^ニレ称シ久遠元初ノ自受用身ト耶、答外用ノ浅近ハ実ニ如^ニ三所問^ト、今ハ内証深秘之故ニ云ニ自受用報身ノ再誕ト也、血脈抄云久遠名字已来本因本果ノ主、本地自受用報身、垂迹上

行菩薩、再誕本門大師日蓮等云云。若擧ハ外用ノ淺近ニ上行ノ再誕日蓮也、若擧ハ内証ノ深秘ニ本地自受用、再誕日蓮也、故知メ本地ハ自受用身、垂迹ハ上行菩薩、顯本日蓮也。

この主張は、諸門流一同の見解として、久遠元初の自受用身とは寿量品発迹顯本の釈尊を意味し、また日蓮はその教法を弘通する仏使として、上行再誕の自覺を持たれたものと理解されてきている。しかしなぜ当流では日蓮を久遠元初自受用身再誕の本仏と主張するのか、という問いに対するもので、その典拠として「両卷血脈」の教示を元に、日蓮を上行再誕とするのは浅い見方で、相承にしたがい奥深い見方をすれば、本地が自受用身であり、日蓮はその再誕であるという教示が看取できるとする。すなわち、久遠元初自受用身とは日蓮を示すとし、また上行菩薩と本地垂迹の一体関係としつつ、日蓮本仏論を主張するのである。

四 おわりに

以上の考察により、日寛は「両卷血脈」を日蓮より伝授された重要な法門書として受容し、本抄を以てその教学を組織している一端が理解できた。そして、日蓮本仏論などの主張は、日寛独自の教義というよりも、「両卷血脈」に基づいて導き出された教義であることが垣間見えた。日寛教学をより鮮明化するためには、「両卷血脈」や、その他の相承書に着

目し、それらを多角的に検討する必要がある。その点については今後の課題としたい。

- 1 執行「一九五二」六一七頁・望月「一九六九」三二〇頁。
- 2 『宗全』四卷九五頁。
- 3 『宗全』四卷二三頁。
- 4 『宗全』四卷二六頁。
- 5 『宗全』二卷一頁。
- 6 大黒「二〇〇二」二二四頁。
- 7 『宗全』二卷一〇頁。
- 8 『宗全』三卷三七〇頁。
- 9 『宗全』二卷二七頁。
- 10 『富士学林教科書研究教学書』五卷一三七頁。
- 11 『宗全』四卷三三四頁。
- 12 『定遺』一五八九頁。
- 13 『宗全』二卷二頁。
- 14 『宗全』二卷二三頁。
- 15 『宗全』二卷二三頁。
- 16 『定遺』七一五頁。
- 17 『定遺』一四〇頁。
- 18 『宗全』四卷一六頁。
- 19 『宗全』四卷二六頁。

〈参考文献〉

- 執行海秀『日蓮宗教学史』平楽寺書店、一九五二
望月敏厚『日蓮宗学説史』平楽寺書店、一九六九
富士学林編『富士学林教科書研究教学書』富士学林、一九七〇
日蓮正宗宗務院編『六卷抄』日蓮正宗総本山大石寺、一九九六
大黒喜道「日蓮の種脱論とその展開」『興風』第一四号、二〇〇二
榎木境道『日寛上人と興学』妙教編集室、二〇〇三

〈キーワード〉 日蓮、日蓮本仏論、日寛、大石寺、両卷血脈

(立正大学日蓮教学研究所研究員・修士(文学))